

ミスター・K の英語教育ワンポイント指導ヒント

千葉県旭市教育委員会外国語教育アドバイザー

千葉大学 教育学部 学校教員養成課程

東京女子大学 現代教養学部 国際英語科 非常勤講師

加瀬 政美

【第18号】 小・中学校向けバージョン 読みの指導で指導者が意識すること

英語の授業で、英文を、「声を出して読む」というのは昔から、大切な指導の一つで、これをやらない英語教師はいないと言っても過言ではありません。Repeat after me や native の音声教材の後を repeat させる指導は今でも伝統芸能のように続いている。指導者は、その時、学習者に何を意識して指導しているのでしょうか。

英語の上達のためには、音読は確かに効果的です。音読する時には、ただ声を出して読めばいいというわけではありません。相手に伝えたい意識を持って、心から言葉を繰り出すような読み方が大事です。それはなぜか？イメージが頭に浮かぶからです。文字が読めるようになることももちろん大切ですが、コミュニケーション能力の育成という観点から考えるとどうような場面を想像して、どのように読めばいいのかを意識することで、話したり、書いたりする表現につながってくると思います。例えば、本を読んでいて、自分の発話するイメージのセリフがあったら、本を閉じて声を出して言ってみると効果的です。そうすることによって、言葉が自分のものになり、自分で言葉を繰り出せるようになります。スピーチにつながってきます。つまり、音読は、文字を通して、心から心を繋ぎだすことになります。門田（2012）は、音読の目的は2つあると言っています。

- ①音声と文字を結びつけるための音読
- ②語彙や文法規則を内在化させるための音読

ゆえに、音読活動は、アウトプット活動ではなく、インプット活動だと鈴木（2012）は述べています。

そうすると、「英文を読ませて、その音読を評価する」、これだけでは「表現力」では評価に至らず、「知識・技能」の範疇になるのです。現場で多く見かける活動に、クラスで児童生徒が発表する場面で、発表で自分の言うセリフの原稿を棒読みにしている姿です。これは、「発表」という領域の「話すこと」の技能としては課題があると言っていいでしょう。この課題改善のために、指導者としてどのような助言をするべきか、それは相手の心に響くように話す、母語である日本語でも同じことが言えるはずですね。

参考文献

鈴木寿一・門田修平(2012). 『英語音読指導ハンドブック』東京：大修館書店